

板井正斉著

『やさえあいの神道文化』

室 田 一 樹

現代神社の底力を引き出し、現代社会が抱える諸課題、とりわけ希薄化する人と人との繋がり＝支え合いの再生に寄与できないか、それが本書の主要なテーマであろう。

著者である板井氏の研究分野は、日本の民俗宗教である神道を軸にした宗教社会学であるが、福祉文化論も視野に入れることで、神道と福祉研究という新たな神道文化研究に独自の道を開いた。その研究態度は、フィールドワークとデスクワークがほどよくバランスされていることに加え、神道文化を内部から研究するに止まらず、社会の側からの視点も忘れないことに特徴をもつといえよう。いわば神道文化研究に内と外の両方向からアプローチするところに板井氏の真骨頂を見る思いがするのだが、端的に言えば、手前味噌になりがちな神道研究に程よい抑制を利かせた研究態度なのである。神道教化的に言えば、教化の主体と客体という文脈を離れ、現代社会の要請に神社はどのように応

えるのか、その営みに神道文化の新しい局面を見出そうと、板井氏は研究を続けている。ではその社会の要請とは何かと例えば、地域であり、環境であり、福祉であり、文化なのである。さらに板井氏の研究に引きつけて言えば、地域福祉であり、ソーシャルキャピタルであり、ケアであり、人と人の繋がりであり、支え合いなのである。

さて、本書は三部からなり、第一部は神道文化に基づく地域・福祉・文化研究の今日までの業績を振り返り、宗教研究において混同されがちであった福祉と社会貢献を整理し、さらにNPOやNGOなどの活動に見られるような「新たな支え合い」に、神道文化という伝統的価値観が機能する可能性を提示する。板井氏はここで、研究の実証性や客観性を担保する理論構築を試みているともいえるであろう。たとえば、「一般化した福祉を社会貢献と安易に結び付けたことが、〈神道と福祉〉や〈神道と社会貢献〉とのかかわりを論じる足腰の弱さになっているといわざるを得ない」（四四頁）と断じて、「神道と社会福祉」「神道と社会貢献」を使い分ける研究視点を提示している。加えて、「新たな支え合い」をめぐる伝統的な価値観の可能性に言及したところでは、「伝統的価値観の〈意識性〉よりも〈文化的空間性〉の積極的開放・活用を優先させることに現実的な有効性を見いだせる」（七〇頁）として、後の伊

勢参宮やトボスにまつわる議論の伏線を用意する。

次に、「障害者・高齢者の伊勢参宮とそれを支えるボランティアの相関性」と題された第二部では、NPO法人伊勢志摩バリアフリーツアースターの理事・専門員の肩書きも持つ板井氏のフィールドワークを基礎資料に、ここでは伊勢参宮する障害者・高齢者とそれを支えるボランティアの双方の意識を調査分析して、そこに本書の主要テーマに関わる板井氏独自の見解を見いだしている。板井氏は、障害者・高齢者の伊勢参宮を支えるボランティアの活動動機には、利己的、利他的、あるいは信仰的といった個人因子とは別に、伊勢神宮だからという環境因子が交差することをあぶり出した。その傍証の一つとして板井氏は、江戸時代に見られた熱狂的な集団参拝であるお陰参り研究を取り上げ、お陰参りだからこそその施行（食事や宿、移動手段などを無償で提供した）に言及していることなどは、評者にはとくに興味深かった。ただ、しばしば用いられる「伊勢神宮らしさ」の多様性に関する考察が物足りなく感じられるのは評者のいたって個人的な感想なのだろうか。頁を先に急ぐことになるが、板井氏は、——本研究の成果と課題——と副題の付く「おわりに」において、第二部を次のように概括している。

第二部では、〈文化的空間性〉が果たす役割をより具体的な社会課題から明らかにすることを意図して、障害者・高齢者の伊勢参宮とそれを支えるボランティアの相関性について実証的な考察を加えた。その結果、障害者・高齢者を取りまく社会課題を車いすによる伊勢神宮参拝の一瞬に凝縮させることで、参拝する側と支える側の支え合いに、「宗教的ニーズ（参拝したい・参拝させたい）」と「福祉的ニーズ（支えられたい・支えたい）」が両義的に存在しており、それを包含する形で「伊勢神宮らしさ」という多様で曖昧な意識が、いわば環境因子としてそれぞれの動機をつないでいることを明らかにできた。（二二頁）

私の理解では、「伊勢神宮らしさ」の多様性とは、参拝者が伊勢神宮のどこに、何に伊勢神宮らしさを感じるのかという、いわば参拝者の思いの多様性である。であるなら、伊勢神宮というトボスが内包する聖性もまた、多様であり曖昧であることになる。ただ、この議論では伊勢神宮を聖地とはせずに、単なる観光スポットととらえる人を除外することになるが、議論の対象となる聖地が観光客など訪れることのない氏子によって信仰される地域神社であれば、その地域神社に氏子が抱く「地域神社らしさ」の多様性や

曖昧さは、氏神さま、鎮守さまというトポスが内包する聖性の多様性と曖昧さに等しいことになる。それが板井氏のいいたい〈文化的空間性〉に他ならないだろう。それはまた、板井氏が引用する櫻井治男氏の「Being Together」に繋がる。それを板井氏は、「精神的な拠り所としての、あるいは祭礼を通じて地域社会での伝統的な神社の役割を振り返った上で、神々をも含めたあらゆる存在とともに、そこに在る事こそが神社の役割だとする」(二三頁)と説明しているが、そのように新たな理解を付与された神社に「やむをえないの神道文化」が展開することを期待して、板井氏の著作にもどうう。

板井氏は第二部第四章の最後の節「五 環境因子としての〈伊勢神宮らしさ〉の多様性」を、次のように締め括っている。

民俗宗教としての神道文化が作り出している様々な「神道らしさ (Authenticity)」を環境因子としてとらえることで、日本人の精神的基層にある宗教性とボランティアとの古くて新しい関係性が見いだせると考える。伝統文化や日本文化等と一般に呼ばれているような現象へかかわる人々の動機を個人因子と環境因子の相関性から改めて分析することで、日本的な「助け合い」

「支え合い」のありようの中に、内発的な地域文化に根ざした価値観をとらえられるのではないだろうか。

ここに引用した数行は第二部の末尾でもあり、このあとに本書のまとめである第三部「ささえあいの聖地へ」終章「NPO 法人が豊かにする神道文化 伊勢神宮だから参加する人々」が配されているのだが、評者の理解の範囲では、終章における板井氏の議論は、未だ「伊勢神宮らしさ」を超えて「神道らしさ」に及んではおらず、今後の研究に期待したい。

以上が本書のあらましであるが、読み進めるあいだに評者には、ある課題が生じていた。それは板井氏の研究成果を、地域神社の神主である評者がどのように参考にすれば良いのか見当がつかないことであったが、それについては板井氏も、「残された課題も大きい。それは、主に検証した伊勢神宮の事例をすぐに地域神社に置き換えることは規模や性格等の違いから無理があるからであり(中略)、伊勢神宮を象徴的な事例としつつ、地域神社と市民活動との相関性を導きだすことが今後の最大の課題である」(二二二頁)と、「おわりに」に述べている。そこで、これ以下の問いが書評の役割の範囲を逸脱するものであることを承知ながら、板井氏にぶつけてみたい。

〇〇円

(岩屋神社宮司、岩屋保育園園長)

「農村型コミュニティ」対「都市型コミュニティ」、「地縁的活動」対「市民活動」、「祭祀奉仕」対「ボランティア」、「非言語的」対「言語的」といったような対比は、「地域神社」対「伊勢神宮」という対比に相似である。板井氏は「伊勢神宮を象徴的な事例としつつ、地域神社と市民活動との相関性を導きだすことが今後の最大の課題である」とされるが、それは地域神社と市民活動を対比的に見ることから導きだされる相関性なのか、それとも地域神社で行われる市民活動と位置づけたうえでの相関性なのか、そのあたりを明確にした上で、「氏子区域に居住するから氏子」のではなく、「氏神さま、鎮守さまに護られていると思うから氏子」であるという氏神あるいは鎮守を核とする、現代社会にあっても極めて地縁的な人の集まりを、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）と捉えることで生まれる可能性について、是非とも板井氏のお考えを拝聴したいと思っている。

板井氏は神と人のあいだにNPO法人という中間組織を位置づけることで、みごとに伝統的価値観としての「伊勢神宮らしさ」を浮き彫りにしたが、評者は氏神と氏子との在りようにこだわって鎮守の森のもつ地域福祉力を模索し続けるであろう。これは私の読後感でもある。

(弘文堂、平成二十三年六月、A5判、二四八頁、四二